

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(39)〉

保育学会自主シンポジウム

「女子大における総合的保育者養成の試み」を振り返って(2)

菊地知子

二〇〇八年五月に開催された第六十二回日本保育学会での自主シンポジウム後半の様子をたどろうと思います。二月号に記載した話題提供者によるそれぞれの保育の場での話を受けて質疑応答がなされ、その後、指定討論者からのお話がありました。以下その詳細です。

シンポジウムの実際(後半)

津守房江(保育研究者) 「総合的保育者養成」という、

この目新しい言葉は何だろうと思ひ、「幼児と教育」の

〈幼・保・大連携〉のページを、現在からさかのぼって一冊ずつ見ていきました。この言葉自体は二〇〇七

年の秋ごろに出てきて、その根拠のようなこととして、

二〇〇八年一月号の巻頭言に、新しい時代に自分たちに要求されていることは何か、家庭とは何か、保育とは何かを根本から考えていこうと、今日の司会の浜口先生が明快に書いていました。そしてその証として、「幼児の教育」の表紙の「家庭・保育所・幼稚園」という文言を、「乳児期の育ちと保育を考える」と変えた。時代の流れが大きくある中で変わったんだと思うんです。

さまざまな社会情勢の中で、総合的保育者養成というものが生まれてきた。それはきつと、最近頻繁に言われる保育者の専門性ということとは少し質の違う議

論なのだろうと思います。実習先などの保育の場も、それぞれにいろいろな制約がありながらも、子どもが生きるということをちゃんと考えようとする方向性をもち、今日のこのシンポジウムに至っている。私たちが目指す保育は、ただそれぞれの場でうまくやり、名声を博すようなものではなく、どこにしようとして子どもの視点、弱い者の視点に立とうとしてそれを支援していくというものだと思います。それをこれからの方向にしていこうと、二〇〇七年のそのあたりで切り替えられた。舵を切ってまだ二年ですから、これからまだまだどんどん変わるだろうととても楽しみにしております。

牧野（お茶の水女子大学名誉教授） 保育の広い資質というのは、ケアの問題と深くかかわっています。社会学や家庭教育学が専門の立場からは、ケアというのは、ケアされる側、つまり当事者のニーズ、心に沿う、という社会的な活動として成り立ってきたと言えます。介護の研究で、高齢者や障碍のある人の立場に立つ人は、それらの人々は当事者であるということをしつと

言い続けてこられました。では、生まれたばかりの赤ん坊はどうか。最も弱い存在で、私のことを代弁してくださいと言えないような子どもたちは、実はまさに、当事者そのものなのです。その子どもの側に立てるかどうかということは、日本が経済的に発展し、能率的・効率的な社会になってきた中で、最も非能率的で非生産的、最も経済効果を生まないというような存在に私たちは目を向けることができるのかどうか、ということ。物が豊かになることではいかにも人間が幸せになったように思われる中で、私たちは改めて、経済中心ではない世の中を考え直さなければならぬ。

乳幼児や障碍のある子どもたちを受け入れている施設に行った学生が、変化し育てられてくるということは、赤ん坊の中にその力があり、その力を、周りの環境が引き出せる、ということではないか。そのことの意味を学生たちに伝え、乳幼児、障碍のある人たちの中にある力を汲み取れる、そして心を汲み取れる人を育てるようなカリキュラムを、受け入れ側と一体と

なつて考えていこうというのが、シンポジウムを主催した幼保プロジェクトのねらいであるということをおわかりいただけるとありがたいと思います。

質問者 子どもの側に立つ、赤ちゃんの側に立つとはどのようなことなのか、うかがいたいと思います。

牧野 子どもの側に立つということをたくさん発信してくださっている津守真先生、お話しください。

津守真 赤ちゃんがこのシンポジウムの中に居たらどういう発言をするのか。ついこの間自分の脳が壊れたところだったので、いま私はちょうど、当事者である赤ん坊に近いところにいる一人じゃないかと思ひます。答えを出すのはとても困難です。いままでにカリキュラムというと、行政の側から、保育士の側から、幼稚園教員の側から、学者の側からと、随分出そろつてきてはいますが、それらで答えを出そうとしても、多分うまくいかないんじゃないかという気がします。赤ちゃんや、重度な障害をもつた人たちが、この中でどう発言ができるのか、発言は許されるのか、議会は

それをどんな眼で見えるのか、行方に期待しています。

房江 私はいつも具体的なことで考えますけれども、赤ちゃんの側に立つということ、弱い立場の側に立つということは、いつもそのことを心に思っていれば、はっとした時、本当にとっさの時に、力を出せるんじゃないかと楽観的に思っています。常識的な流れからは少し違った何かを、新しくしようとする時にはいつも、変えなきゃならないことは変える勇気をもつこと、そして変えなくてもいいことに対しては心穏やかにそのことを見ていること、変えることと変えないことの違いを見分ける知恵があること、そういうことが大事なことだと思っています。

牧野 いま、ここに赤ちゃんが居たら、どのように存在しどんな発言をするだろうかという想像力、いま、この場でも赤ちゃんを考えられるその心を、津守先生が言ってくださいました。赤ちゃんを理解することを一つの答えて言うことは難しいかもしれない。私は、じっくり赤ちゃんを見ることの中から、声にならない、

言葉をもたない赤ん坊の言葉を読み取る、心を読み取る、気持ちを讀み取る、ということなのではないかと思ひます。ご一緒にいつまでも考えていきたいと思ひます。

佐藤（障がい児放課後クラブはすねっこ代表） 昨日

ここに来る時、久しぶりではすねっこに来ていた男の子が「遠くに行っても僕のことを忘れないでね」と言つて見送つてくれた。その子は、去年の秋口、中学生から高校生になる進路の話が出るようになったころ、その子にとつていろいろな思ひのあるものをたくさん詰め込んだかばんを家から背負つてやつてきて、それをはすねっこに託す、預けて帰るといふようなことがあつた。そうすることで彼の負担が軽くなつてゐるんだらうか、とか、彼自身が自分の中で何かを変えようとしてゐるんじゃないかと、何となく感じてはいたけれどその時点で答へのようなものはなかつた。だけど昨日、高校に入つて初めて久しぶりに来たはすねっこには、中学の卒業アルバムだけを持つてきた。中学校

から高校に上がる彼と三年間、彼と僕、彼とスタッフ、いろんな人たちとのその時々のお出ひがあり、その関係性や出ひを積み重ねてきた。そこに学生さんたちが来てくれてどんな出ひを子どもたちとしてくれるのか、そういう場をどうやつて作れるのか、ということとは、常々考へてやつてゐるような気がします。学生さんとお話する中で、自分でも感じてはいたけれども改めてああそういうことだつた、と思つたり、またそれを学生さんたちに言葉として返したりというやりとりをしてゐる。はすねっこは、地域（の居場所）という、職業的であるとか資格とか免許には全く関係ない場所です。そこで学生さんたちが子どもたちと出ひ、一緒に生活をつくつてくれている、その一員になつてくれているということに本当に感謝しています。

私市（お茶大附属いずみナーサリー主任） 先ほどから私は、赤ちゃんの側に立つつてどういふことなんだらうということしか頭になくて、たとえば睡眠の場面で泣くということ考へてみました。その子の生活の

中ではもう眠いはずだからと思つて布団に入れる、でも寝ないでわんわん泣いている時もある。それを私たちは、この子はこの時間にもう絶対寝るものと頭で判断して寝かしてしまうのか。そうではなくて、寝ない時にもう一度立ち止まつて、振り返つて、どうしてこの子は寝ないのかなあつて考える、ということがすごく大事なんじゃないか。理屈ではもう寝る時間、これはもう寝る表情と、学生さんにとってはそうだとしても、知っている理屈や理論とは違う場面が現実の保育の中にはある。それを私たちが、どんなに長くやつていても自分のつたなさに気づいたり、謙虚に子どものことを考えて、言葉の言えない子どもの立場に立つたりするということが子どもの側に立つということなのかなつて思いました。

浜口 学生たちは実習の場で、一人の人間の本当の人生に出会っている。また、その実習先が置かれている社会や抱えている困難も垣間見るのだと感じました。

宮里（お茶大附属幼稚園副園長） 赤ちゃんや幼稚園

の子とか、ここにいろいろな子が居たらいいのにと思いました。それから、子どもの側に立つというよりも、子どもの居場所に出ていくことで、思いもかけず子どもの側が飛び込んでくる、という感じがあるのかもしれないと思えました。総合的保育者という言葉についても考えてみました。小学生と中学生が一緒の授業を受けると、中学生が学生のみずみずしい感性、素直な反応によって向き合い方が変わるとか、高校生が幼稚園に来ておもしろいとか、異年齢が共に居るということや学び合い、つながり合い、何かを失いつつ成長しつつあるということなどをていねいに考えていくと、総合的保育者ということを意識しながらの養成の意味が見えやすくなるのかなと思つたりしました。そして、いったいどこへ行くんだらうつて思えるシンポジウムつて素敵だなあと感じました。

質問者 方程式的ではない実習からの学生の気づきについてお伝えいただければと思います。

高橋（お茶大附属幼稚園教諭） 私たちは本当に、学

生さんに子どもや自分自身のありのままを感じてほしいし、泣いてしまうようなその人であっても私は受け入れようと思っています。でも、全部そのまままで実習を終えてほしくないという気持ちはもちろんあるので、ちょっとこういうふうに見てみたらとか、考えてみたらとか、伝えようともします。でも、私たち教員とのかかわりからだけではなく、子どもとのかかわりそのものの中で学生さん自身が変わると感じています。

牧野 いろんな在りようの子どもと接することで私たち自身も、まさにその人間関係の中で育てられるのだと思うんですね。一生懸命その人の話を聞くという体験してみると、そんな言葉を使うのか、そんな考えをもつのか、そんなに泣くのか、と、違うタイプの人と接するということが私たちを豊かにし、成長させてくれると思います。子どもと触れるということの中で中学生も高校生もそして大学生も、豊かさを広げていてほしいとしみじみ思っております。

房江 学校（大学）で学ぶということが、社会に出て

からの（職業など狭い意味での）モデルではなくて、人生のモデルになるようなものであったらいいなと思います。学校が免許や免状をもらうために行くところ、というのではなく、生きるこの本質がところどころでピカッピカッと光るようなところであってほしいと願っています。私は、自分がずっと保育を、保育学を学んできて本当によかったと思うんです。家族が病気になる時、家族が出て行った時、失敗した時、そんな時自分はどうやって立つのか。立つじゃない、寝ているかも知れませんが、どうやってもちこたえるかっていうことを学んだと思っています。

浜口 お茶大での養成は、お茶大生が将来生きること
に活かせる養成ということになりますが、これがお茶大の枠に納まらずに、どこかで社会につながっていくことを願いながら頑張っていきたいと思います。ご協力よろしく願っています。

今日はどうもありがとうございました。

（幼保プロジェクト専任講師）